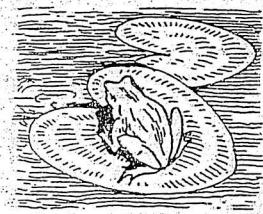


# よりたよし講座

「心理学講座」第6回配本附録

東京都神田区内神保町2の24 電車通り 株式會社 中山書店



西田博士の

## 「善の研究」と心理学

木村禎司

博士の数ある著作のうちで、この書ほど広く読まれたものではなく、約半世紀を経過した今日でも、いまだに、readableな点は驚異に値す。

博士はその序文でこの書の

心理主義的である点をみ

ずから認め、その後に修正

されていったことを述べておられるが、われわれはむしろその心理主義的な点が博士の魅力なのではないかとさえ思うのである。高坂氏は同書で先生は「實際 生命の哲學者であり、先生自身が常に新たな生命の泉であった」と述べており、寸心日記にも示唆によつてゲシタルト心理学の文献を集め出したともいつている。この傾向は晩年にいたるも変化なく、「経験科学」や「日本文化の問題」等にはレヴィンの「トポロジー」心理学や「人格の力動論」が引用されているのもわかる。そのほかキルベの「ユールップルグ学派にも注目された」というし、ブレンタノやマイノングも読まれたようである。

「善の研究」は明治四年（一九一一年）に出版され、博士にとっては処女作であると共に、唯一の系統的著作であった。しかも西田哲学の根本的性質はこの書のうちでほとんど決定されているといわれ、

西田博士も善の研究で「純粹経験」を論ぜられたことは全く心理学的であった。「純粹経験」はテッエナの「感覺」や元良博士の「自全経験」を思われるものがあるが、単なる心的事実でなくて意味を

含んでいる点が異なる。そこで早速高橋里美氏からそらした点について批評があり、その応答が「要素と体験」にものっている。それらを総合して見ると純粹経験は非純粹な経験と区別するためよりも「むしろ知覚、思惟、意志および知的直観の同、「型なる」とを論証するのが目的であった」という。純粹経験は経験の「内容」を示すよりも、経験の「形式」を示すものとなつたのである。この形式といふのは同書の「論理の理解と数理の理解」に「動的一般者の発展の過程は先づ全体が含蓄的に現はれ、之より分裂対峙の状態に移り、復元の全體に還る」というのに見られよう。「善の研究」でもたとえば思惟は純粹経験の統一の破れたのを再統一する働きで、欲求は均衡の破れた状態を再びもとにかえす働きであるといつてある。これらの考え方は全體から部分へ、部分から全體へというゲシタルト学派の思想にも通するものであるが、當時ゲシタルト学派は誕生以前であったのであるから、博士は一体どこからこの思想をえられたかが問題になる。この考案はスタウトにあり、わたくしはスタウトからかと思うのであるが、スタウトは善の研究でも引用しており、

山内得立氏も心理学者のうちで博士が特にスタウトを推崇している由を「寸心寸語」の後記で語られている。

さらに善の研究では純粹経験は統一されれば「事実」となり、分裂すると「意味」が出てくるといつてある。それが後の「意識の問題になると「意識作用は意味から意味への内面的推移である」(二二頁)となり、意味が自身で発展的に活動するにいたるが、このように意識を活動的に考えるのはジエイムスやミニンスター・バークはもちろん、フランスで「観念力の心理学」を書いたフリボーにも共通のものがあるといえよう。

かように西田博士の心理学は経験の「形式」と「統一」と「活動」とを根幹として、それから経験の「恒常性」や「客觀性」がみちびかれてくる。「論理の理解と数理の理解」では経験の Identität が深められ、善の研究第二篇では統一された純粹経験こそ唯一の実在であるとなる。そうして結局は「個人あっての経験でなく、経験あっての個人である」ということにしてゆくのではないかと考える。

が、ここで善とは行為の価値であるとして簡単な価値論が述べられる。活動説をとる博士は意志の遂行そのものに意義を認め、意志の満足に価値の本質があるとする。この点はミニンスター・バークの「価値哲学」(一九〇八)に共通なものがあるが、はたして直接の影響があつたかどうかはわからぬ。

このように西田博士の善の研究が心理学的なものを基礎にしているのみでなく、その心理学が當時隆盛であったヴァントなどの要素主義的な方向ではなく、ジエイムスやスタウトの線にあつたことが、その生命を長からしめるゆえんではないかと思うのである。ジエイムスはシュトゥンプと長く、スタウトはブレンターノやマイノングの影響を受けていることすれば、博士の心理学がゲシタルト学派と親近性を持つこともなんら不思議ではないといえよう。(日大助教授)

## 法医学入門

A5  
判  
函  
入  
上  
製  
日本學士院會員  
日本犯罪學會長

## 古畑種基著

# 医学学生に

## 心理学を講ずる

古 武 順 正

新制でいえば教養二年間を終って医学部に入学する。生理学、生化学、解剖学からはじまって、フィックスせられた小学校の上うな時間割がつづく。一年過ぎて二年目のはじめに時間割の中に突然学生の予期しない心理学があらわれる。教養で一応心理学をやっているので一寸変な気がするらしい。でもこの頃は実にやりくなつた。昭和二十年頃私がはじめて大阪帝大医学部で講義を始めた時にはさき手よりもこちらの方が大弱りであった。阪大医学部の久保さんといふ生理学の教授はなかなか面白い考え方をもつ、しかも勇ましく実行した人である。京大の哲学でフランス哲学ことにデカルトなどを研究してフランス留学生になっていた沢瀉久敬氏と大いに馬がある。昭和十五年頃から医学部の正科として医学概論（私は医学原論といった方がいいと思う）をやつてもらつたり、私に心理学をしゃべ

らせる機会をあたえたり、えらい人だと思う。私は考えた。一つ、一ヵ年間毎週二時間心理学ではなくて心理学を講義してやる。うして、生理学の勉強で一生懸命、講義に出ると心理学の復習みたいだ。ところが毎回の講義の結論は「生理学はない。これからさきはどうなるのだろう」と心理学の予告篇、よく映画館でみせる予告篇をやつてのけるのである。予告篇といふものなかなかむずかしい。次回にまた学生が喜んでやってくるようにいいところばかりちらりちらりとみせなければならないからである。けれどもこの映画館は予告ばかりで本ものは一回もなしである。

この一年間に私に一つの不安が生じていた。生理学をおしつめて、心理学の予告をする。ところがこの予告した心理学をよくよく考えてみると、形だけで味のない理くり。脳と顔だけ足のないわふわした心理学。こまつてしまふと科学の仲間からそっと逃げ出して哲学の穴にかくれそうになると逃げ出して哲学の穴にかくれそうになると眼がしょぼしょぼしてしまう。空いぱりぱりのよな気がする。でもまた一方

にはこの不安の底から一つの自信がむくむくと頭を出してきた。それは、心理学という學問がながい間、なやみづけた対象は何か、何を研究しようとしているのかという問題である。未だにはつきりしたとはいえないものの長い労作は大したものだ。生理学者や解剖学者はこの苦勞がない。したがつて方法論的な考え方ができる。一年の講義が終りに近づくにつれて生理学や解剖学の悪口をちょいちょいいたくなつてきた。

二回目の講義をはじめた。生理学とばかりにらみっこではつまらないから勇ましく臨床医学ことに内科や外科、一般に診断学までにらみわしてやることにした。大いにあはれたのはいいがよく考えてみると私の講じた心理学は夢の世界の心理学になつていていた。心理学はこんな學問になつてはしないという希望講義なのにはがつかりした。紙片一枚三〇円で買って百万円の可能性ににやにやしてぶるのが私の講義室から出てくる姿であったに違いない。

阪大の講義は二年生だったが、いろいろと考えて大阪市立医大では一年生、兵庫医大では三年生にしやべつてみることにした。講義対象を変えることよりもやっぱり何よりこちらの体験である。三回目の講義から生理学や解剖学にらみつけるのを止めて

医学生自信をにらみつけることにした。メスを正眼にかまえた百人の医学生の中に身に寸鉄をおびないでゆうゆうと割込んでゆくのである。私は抽象的理論を述べる前に必ず日常の茶飯事から出発した。心理的といふことがどういうことが具体的に説明しようとした。役に立つということを今まであまりにも考へなかつた自分を反省して役に立つ、ただし、現在と共に将来の役に立つだらうということを十分考へながら、心理学を考へてみた。所詮は医者になる者が大半数である医学生である。「役に立つ」のでなければ面白くても右耳から左耳へ通り抜けである。私の説明することがはじめて具体的にサイコ・ソマティックメデシンにつながるようになつてきらしい。

私は四つの講義をすることにした。第一はモーティヴェーションに関するものである。これはなかなか厄介だが医学生には非常な興味をひかせる。生理学が無視し、臨床医学が大いに関心をもつてゐる現実の問題に關係があるからである。第二はディスクリミネーションである。これは生理学と心理学の関係をとりあげてゐるようなものである。生理学を見事にやつけてみたり、生理学に頭をさげてみせてやつたりする。第三はペーフォーマンスである。心理学の応用に関するいろいろな問題、衛生学など

労働生理や衛生などとの関連から興味をもつてゐる。第四は問題のアフェクティヴェイティである。生理学や解剖学、臨床医学のあらゆる分野にひつかりができる。直ぐに進みにくくて大弱り。でも心理学の考え方を勇ましくおし通す。これだけで一年を使つてしまつ。こたこたいわなの方があつと印象的である。ミュンツインガーから借りたこの四つのフレーム・オブ・レーファレンスは大変いい都合である。

私のつまらぬ講義をきいて医学部を卒業し、インターンも終つて国家試験に合格した人、もう病院につとめたり開業したりして一人前の医者になつてゐる者が沢山できてきた。「心理」ということがなにかしらある形でかれらの頭にこびりついているらしい。「心理的」に考へることに反感をもたせなかつただけはうれしい。笑い事ではない。医学部の現任教授たちの中には人間の医学の中にあって、はつきり意識しないで、挿図は二八〇、表は五一、関連個所を指摘する脚註など、大変便利もあり、都合がよい。

〔全訂版〕

A5判上巻相入五二二頁  
二八〇葉原色三色版  
定価七〇〇円  
元五〇〇円

『本書は、多数の読者をもつたといわれる前著を、根本的に改訂したもので、挿図は二八〇、表は五一、関連個所を指摘する脚註など、大変便利もあり、都合がよい。

文章そのものについては、今さら批評するのも野暮というものの、作家本々高太郎がわかりやすくと、とくに気をくばつて書き上げたものだけのことはある。

のだ。(関西学院大教授・医学博士)一九五三、八、一>

生理学概論

はやし  
高橋 勝

医学博士  
東龍太郎博士評

日本語翻訳会員  
I.O.C.委員  
『本書が「日本語で書かれた生理学書のうちで、つねに最新のものであるよ

うにつとめるつもり」という著者の抱負は、ぜひともそのまま実現して貰いたい。良心的に、つねにアプ・トウデイトを誇るには、一苦勞も二苦勞もあることと思うが、著者にはそれを期

待されるだけの資格が十二分にある』

# 精神の病を救うもの

## 塩入円祐

ろう。今日臨床心理学が興隆の氣運にあることはこの意味から非常に喜ばしいことである。臨床心理学は病的を対象とすることと、治療を目的とする点で、完全に精神医学に一致した。

心理学と精神医学は本来密接な関係にある学問である筈である。それは共に人間をしかもその精神現象を対象としている。それにもかかわらず日本では從来あまりにこの間が疎隔していた。

この理由は、いまでもなく両者が哲学と医学という全く異った故郷から生れたためである。その後、心理学は生理学的実験方法を取り入れることによって自然科学としての医学に近付いた。しかし医学がつねに病的を対象とし、実験をおこなう際にも動物を異常状態において観察し、また治療しようとするのにに対して、心理学が「治療」という応用面をになわなかつたのが主な理由であったが、病的への関心が薄かつたことは否定しえないのである。

しかしながらわれわれは自然の実験による病的なるものを、もつとよく見詰めなければならぬのではないか。それによつて正常へのより深い理解もえられるであ

るとき、これが精神病患者を精神病院に監禁するだけで治療の方法を持たなかつた半世紀前と比べて、今日は飛躍的な進歩を遂げたといってよいであろう。しかもあらゆる隣接科学との関係が親密になり、それは当然心理学への関心を深めた。このことは三浦教授がすでにこの月報で述べたように、今年の精神神経学会においての種々の心理学的テストの報告が「空前の盛況」を見せたと述べていることを指摘すれば足りると思う。

心理学はフランスに於ては伝統的に精神医学と結び合い、精神病院での臨床的研究がこの学問への大きな推進力であったことを疑う者はない。今日アメリカでは精神病院における診断は精神病医と共に心理学者がになっており、研究も両者緊密な共同の下でおこなわれる場合が多いようである。

日本でもこの傾向は戰後急速に助長された。いま、東京都下の主要な精神病院はす

べて心理研究室を持ち、心理学者が働いている。そしてこれは今後一層の躍進を見る事である。その理由として（一）戦後の人権尊重は必然的に人間の心理尊重を促し、社会不安による一般の内省傾向と相まって心理学の隆盛をきたしたこと、（二）過去の記述的精神医学から力動的精神医学への転換期に当つて心理学の精神医学への協力が強く要請せられること、（三）診断技術が客觀化せられ、主觀性の強い Jaspers のいわゆる玄人芸 Kennerschaft が脱皮せらることに平行してテスト化傾向が大量に精神医学に取り入れられてきたこと、などがあげられる。

今日世界を蔽うものは不安である。政治の無力が叫ばれ、道徳の再建が説かれるのも、また新興宗教がばっこし、街にうらやの流行するのも、すべて不安の産物であり、不安の克服への努力であるか、あるいは不安によって生じた眞空状態を代償的に埋めるものといいうのである。しかしてこの眞空地帯は新しい心理学と精神医学の著実な発展によつて解消されなくてはならない。心理学と精神医学との提携はもつと強く説かるべきではなかろうか。

（慶大助教授・医学博士）

讀者ノペジ

では第四回原本まで手にしましたが、各分冊の厚みが不揃いなのは感心しない。

心理学界がどんな地位におかれているかを知りたいし、したがつてアメリカ、ドイツ、フランス、中国、スペインなどの心理学の情勢なども時おり紹介していくだけれどうれしいと思います。

現代心理学の弊を集めたものとして、またわれわれ学校と密接な関係のある心理学として十分参考になると思う。感謝とともに一日も早く完結することを祈ります。

当読 理論などの概念的なものだけをやつてゐる私たち大学生にとって、貴講座の  
ような具体的な内容に接して、従来までの  
縦の連闇に横のつなぎがはいつたよりで非  
常に興味深くよんでいます。欲をいえば、  
ソヴェニット心理学のあり方なども紹介して  
ほしいし、またごく最近の本邦心理学の歩  
みも紹介して下さることをのぞみます。

新潟市立多門町中学校  
学生 羽賀 哲志

青年心理、児童心理と名称はかねて知つてゐたが、こんなに広い分野まで心理学が展開されていることは知らなかつた。素晴らしいことだ。完了後にはぜひ心理常用語の手引を附加して下さい。

心理學講座

||第七回配本||內容

愛知縣碧海郡桜井村 学生一条年行

聽感覺記述  
日本放送協會 教育大教授 鳩田琴次  
尾島碩心

應用聽感覺論 // 黒木総一郎  
技術研究所員

# 智能の異常

精神運動症  
研究所以博士  
高木四郎

ホルモンと精神身体機能

言語  
醫學  
博士  
田坂定孝

科 學  
科學論理學會員 篠原 雄

人物語伝ブレントノ

文東 恵大 事教 授 泽良子 衣  
ルトハイマ

テイチエナ  
大文長

高木貞二  
大連授業  
パゾロフ  
関西學院大教授

編集部から

の転載の域を出ないのではないいかと予約當初は懸念していたが、回を重ねるごとに充実してゆく本講座には全く驚異以外の何物もない。また著者の心理学漫歩的なものを講座だよりに収録していただきたい。

名器圖考卷之三

心理学講座も今度で六回の配本

本が進むにつれて多彩な項目と

の真価をいよいよ發揮してきたと  
、社説はすこしも

ます。一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

下さつて、いるから、が、ふりきりして

の努力をつづけてまいります。この最大

いたし、かつ皆様のいつそ<sup>の</sup>うの御支援のほどを心から御願いいたします。